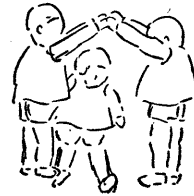


幼児の夢 (五)



一 姫二姫三太郎

これは、実は、幼児の、でなく、おとなの夢かもしれない、といつても、やはり、まんざら、幼児の夢でなくもない実話。

新家庭をもつことになった時の第一の私の仕事は、誰でもと同じく、まず住居を定めることで、ほどよい貸し家を探し出すことであつた。

当時、私は、東京で、私立小学校の二年生を担当していたが、二十一名の男女児童のうち、郵船会社の欧州航路のS丸の船長さん

S家の一人息子さんがいた。その母君も、祖母君も、よく参観に来られ、遠足にも、よく同行されたので、クラスの一同が、たいへん親しくて、その家庭におよばれする事もしばしばで、私も、時々仲間入りさせられた。そして私の新家庭のために、程よい貸し家を探し出していただいたのも、この母君と、この祖母君であつた。

「表通りから少し引っ込んでいますし、お米屋さんが門前にあり、並び合った隣りに、かなりの空地があつて、大きいお風呂屋さんですから、奥様、きつとおよろこびでございますよ。日当りのよい二階建て、まだ新しいんですもの。それに、お家賃も、お格好ですし、敷金も、二つですから、お安い方で——」

ときいても、「敷金」とか、それが、「二つ」とは、一体何の事か知らない私であつた。しかし、佐々木信綱先生が、

「家賃が、月給の三分の一です。皆、そ

葛原 し げ る

んなどころから、始めるんですね」
と申され、同夫人も、私にアルバイトで、月六円也の収入のあることを御存知で、

「それは、奥様のお化粧代に、お続け遊ばすがよろしいですよ」

とも申されたので、安心して、その二階建ての貸し家に住むことに、きめたのである。そこは、本郷区蓬萊町六番地。さきやかな門内には小高い土盛りがあり、かなりの大きさの松が一株、二階の屋根まで枝を張っているのが、郷里の宅の門前の大松をも連想させる
と、悦んだら、S祖母君が、

「松風の音が、よろしいでしょうねえ」
と見上げられたのも床しいことであつた。

S夫人は、金十五円也で食卓や、勝手道具を買い集めて下さるのであつたが、序に、別に購入しておいたものもあつて、一割ほど予算をオーバーしたと報告された。それは、幼児用の可愛い茶碗や、お椀やお皿やお箸なども二人分であつたから、私が、

「まだ、子どもは、一人もいません——」
と、まじめにいうと、

「はいはい。それは、よく分っています
けど、一、二年のうちに、すぐお入り用
おなりですから——」

と、いと、まじめに、食卓の差し向いに、お
となのを二人前、横に、幼児のを、短い箸も
二人前きちんと並べて、つくづく見比べて、
「はやく、こうして、四人お揃いで、召上
るところを拜見しようございますこと」

と、独り悦に入られると、祖母君も、

「本当に、早くねえ」

と、ずい分、気の早いことであった。

しかし、一年あまりたつと、早速、S夫人
に、冷やかされねばならなくなった。

「それごらん遊ばせ。ほんとうにおめでと
うございます。帝大の産科は近うございま
すし、おくからは、奥様一番仲よしの叔
母様が、御上京なさるそうではございませ
んか。それで、いよいよお父様におなり遊
ばすんですけどね、ね、あのう、お嬢ちゃ
まど、お坊ちゃまど、どちらを、お望みで

いらっしゃいますか——」

と半分笑顔で問われて、私は返事に困ってし
まった。今まで、どちらをと、考えてもみな
かった。ただ、帝大の産科に、同郷の友人が
いて、時々、診察してくれるたびに、順調だ
ときいては安心していただけで、男の子をと
も、女の子をと、考えてみたことはなかつ
た。しかし、予定が十二月二十日過ぎだとき
いたので、

「十二月二十五日に生れるといいねえ」

といったら、妻が、

「クリスチャンでもありませんのに」

と笑うので、私は、まじめに、

「でも、十二月二十五日に生れて、世の人

を救うような人間になるといいよ」

といったら、妻は、更に大まじめに、

「そんな、えらい人にならなくても——」

と、きっぱり言いきるのであった。かくて二
十日は過ぎてても、二十一日になつても、何の
徴候もないので、

「もう三、四日だ。一日でも遅い方が善い

よ。きつと二十五日になるよ」

「そんな勝手なこと……」

「延びついでにいっそ一月一日になると善
いね」

「まア、勝手なことばかり……」

「日輪、腹中に入る夢を見ないかな」

「太閤秀吉なんて、何だか、いやですわ」

「臨月になってからの一日一日は、胎児の
發育に、たいそう、プラスだつていうから、
ゆつくりの方が、丈夫な子どもになつて生
れるよ」

「大きくなりすぎると、困るでしょう」

「大丈夫さ、三島君がついているし、ずー
つと標準的の發育だといつていたもの——」

三島というのは、帝大産科の主任医師で、同
郷の友人なのである。

かれこれ、気をもんでいるうちに、女兒が
生れたのは、十二月二十三日であった。しか
も、それが、二十五日でなかつたことも、男
児でなかつたことも、私には、少しも失望で
なかつた。それなのに、S夫人は

「この次は、きつと、坊ちゃんでございます
すよ。一姫二太郎と申しましてネ、はじめ
がお嬢さまですと、次は、きまつて、お坊

「ちゃんですわ」

と、方々の実例をあげてまで、しきりに、私を慰めようと、つとめられるのが、実は、いささか心外であったので、私の姉二人とも、まず女兒を産んで上、大きい姉は、五人目に初めて男児を恵まれておる事を話したりした。実際、私は、少しも、落胆などしていなかったのだ。ところが、妻は、私の友人が二人、私と前後して結婚したのが、二人とも、まず男児の父となったのを見て、内心、氣にかけていたらしい。それは、仲よし三人が、揃って父になり、各々三人家族になって、九人集れるので、記念写真をとることにした時のこと。まず両家族を私の家と呼んで、写真屋に、私が単身先発したから長女をば、妻が、抱いて来るようになったのだが、友人は二人とも、それぞれ、長男を抱いて来たのだ。それを見て、妻は、もし、私のも男児だったらきつと私が抱いて……友人三名堂々と並んで、男児を抱いて歩くのであったろうに、と……私が肩みの狭い思いをしたろうと、氣の毒がったりするのであったが、絶対に、そんなことはなかった。のみならず、二番目に

も、女兒を授けられて、少しも、失望しなかった。それは、忘れもしない大正五年五月一日のこと。実は、その少し前、

「五月になるのなら、五日に生れるといいね」

といったのは、事実である。実際、そうも思つてみたのだ。

「五月五日にね」

「端午の節句ですわね」

「すると、端午に因んで、たん五郎という名にするか」

「あの童話みたいに——」

といったのは私の旧作に「たん五郎物語」という短篇童話があるので——。

この時も、S夫人は、五月に入るや、本郷東片町のお宅から、大久保百人町まで日参して、見舞つて下さって、今度こそ、男児で一姫三太郎が実現することを期待して下さったのが、外れて、いささか、力抜けされたようでもあったが、私は、全く、平気で、一姫と共に、二姫の可愛い顔をのぞいては、悦ぶのを、日々の楽しみとした。そして、よく乳をのみ、よく泣いては、大きくなるのを楽し

んだ。二つになり、三つになると、一姫と二姫と、何でもお揃いに作つてやつては、いかにも姉妹らしく、育てた。かくて、その翌年の三月には、三番目の子どもが生れることになるや、S夫人の緊張は、今までに見ないほど真剣であった。来るたびに

「今度こそ坊ちゃまですよ。旦那様のお年と、奥様のお年を加えて、生み月の三で割つて——」

それに何とかすると、何とか出る数字から判断して、きつと、坊ちゃんです、とS祖母君が、何とかさまに参詣して、おみくじも出たんですから、と、自信満々なので、

「じゃ、いよいよ一姫二姫三太郎ですかナ」

と、私も、何気なく、軽口をきいてしまったが、その語が、妙に、私自らにもたいそう氣に入ることになったので、たまたま、一姫二姫の生い立ちの記を、出版することにした。その書名に、それを採用しては、と、出版元へ提案したら、大賛成だという。しかし、氣がついてみると、その原稿は、一姫二姫の事ばかりなので、「急に三太郎のサーベル」

という一篇の仮作物語を書き添えて、いよいよ、郷里の大先輩で児童心理学の先覚者でもあられた高島平三郎先生に序文をお願いしたら、

「一姫二姫三太郎とは、おもしろい」

と、ほめて下さった。巖谷小波先生は

一姫の一番高き雛かな

白酒を二の姫の只甜めたまふ

背より高き菖蒲の太刀や三太郎

名乗り出て印地の猛者や三太郎

年玉や一姫二姫三太郎

と、大ニコニコで、すらすらと、色紙を五枚かいて祝って下さった。私はいよいよ大自慢で、

「一姫二姫三太郎、とてもいいよ、ねえ」

と大きげんでいるのに、真正面から大反対して、その書名ばかりは止めてくれと、強く主張しだしたのは、誰あろう、妻であった。

「もし、三太郎でなくて、三姫が生れたらどうなさるんですの、世間に偽りをいうことになりませよ」

と、たいへん、心配するのも、無理はなかった。が私は、

「大丈夫さ、きっと三太郎だよ。間違いないよ。一姫二姫三太郎になるよ。清水良雄画伯の挿絵も、もうできて来るよ。一姫二姫が、左右からサーベルをさげた軍服姿の三太郎の両手を引いて、七五三のお宮参りをしている絵が——」

「まあ、本当に、そうなると、嬉しいんですねえ」

「そうなるよ、きっと」

と断言しながら、実際は、自信なんてあるはずもないことは、分っているので、妻は、

「もし、やっぱり、女の児でしたら、どうなさいますか？」

「そうしたら、一姫二姫三姫四太郎さ。それもだめだったら、一姫二姫三姫四姫五太郎さ。それもだめだったら、一姫二姫三姫四姫五姫六太郎さ」

「まあ、勝手なことばっかり……」

で、二人とも笑ってしまったが、ありがたや、三月二十八日、まさに、三太郎誕生で誰よりも一番に

「それごらん遊ばせ」
と、大いばりであったのが、s夫人。そして

大よろこびしたのが一姫二姫。そして、実は、口にこそ出さね、大いばりの大よろこびであったのが、妻そのものであったことは、いうまでもない。郷里からも、妻の近親からも、大手柄よ、と妻はほめられて、三人目によつと、ほつとしたと、述懐したことも、いうまでもない。

かくて、小著『一姫二姫三太郎』が、少しの偽りもなく、世に出た後のこと、一姫二姫の若きパパ、若きママが、何か、不安がつて、いささか、ゆううつげに見える向へは、私は、半分、まじめに、

「この本を夫婦で神棚に祀って夫婦でお燈明をして夫婦でお神酒を供えて、神さまに平身低頭して、一姫二姫三太郎を、授かりますようにと祈ること三日三晩に及ぶ時は靈験たちどころに現われましようぞ」

と、ふざけた。しかも、それが実現して、大よろこびの大幸福な家庭を、東京でも、郷里の方でも、いくつも数えることができる愉快さよ。

さて、かくて、私の夢、他愛もないような希望が、実現して、一姫二姫三太郎の三人が揃って、実に楽しく、実に朗らかに、すくすくと生長して二、三年たつてからのこと、毎年、年末も、クリスマスの時季になると、私共夫婦は、この三児にめいめい、

サンタクロースのおじいさんへ
という手紙を書かせることでした。それは、クリスマスプレゼントでなく、新年の、お年玉に貰いたい物を、書き出させる為にしたのである。お年玉は、いささか、サンタクロースと不調和なのであるが、そこは、理くつに合わないけれども幼児の欲しがる物を、買ってやる参考にしたくて、試みて、たいへんよかつたと信じていることである。

一姫こと長女は、小学三年であり、二姫こと次女は一年であったので、仮名文字が書けたが、三太郎こと長男は、まだ五つで、少しも書けないので、姉二人が、代筆して、サンタのおじいさんへ、お頼みしたプレゼントは、

一姫のが、リボン、赤青の鉛筆、羽子板と羽根、花もようの大きいゴム毬。

二姫のが、鈴のついたお手玉、羽子板と羽

根、折り紙、着せかえ人形。

三太郎のは第一に、みかん、そして、尻、白いゴム毬、汽車や電車の絵本。

これらを、いちいち、買い集めて、三つの旅行用の籐のバスケットに入れて、大晦日の夜、三児の枕元においてやるときの親心は、まことに、豊かなものであった。そして、翌日は元日、早く目ざめた一姫が、一番に、バスケットをのぞいて、中の物を出したり入れたりして悦んでいるうちに、二姫も三太郎も目がさめて、大ニコニコ。後には、手におえない重さのバスケットを、引きずって、縁側の明るい所へ出て、三人で並べて見たり、くらべたりして、如何にも幸福そうであったが、バスケットの底の方からはサンタクロースへ頼みもしない杏下が出たり、ハンカチが出たり、その頃、まだ珍らしかったキャラメルが出たりするので、「あら」「やァ」「まァ」と歓喜の声も一しきり。

元日ばかりか、二日の日も、三日の日も、私の内には、お菓子も、おみかんも食べきれ

ないほど入れてあったので、「たべすぎないように」と注意してやるのであったことももちろんのこと。

まことに、僅かな出費で、三児それぞれに満足を与えることができたのであったが、さて、二年目からは、サンタクロースへの手紙で所望する品物の他に、三名別々に貯金帳をこしらえてやった上に、別に、お年玉を、美しい熨斗袋の小さいのに入れてやったのを、後で、局へ連れて行って、貯金することを覚えさせた。

ところが、一姫が五年生、二姫が三年生、三太郎が一年生になった年の、サンタのおじいさんへのおねだり手紙には、三人とも、第一に、「ピアノ」とかいていたのには、驚くよりも、まいてしまった。こればかりは、何としても、叶えてやれない望みであったから——。実は、こどもよりも父たる私が、母たる妻が、かねて、ピアノは、大いに慾しかったのである。時々、それを、家庭の話題にのぼせたことがあるのである。三児の前で、話し合ったことも、一度や二度ではなかつた

のである。その上、一姫二姫が、小学校の課外に、新任の若い音楽の先生の熱心に、引きつけられて、ピアノを習いはじめてから、急に、二人が、ほしがり出したのである。しかも、お友達の中には、急に買ってもらった方もあって、羨ましがるのも無理のないことであつた。

「ねえ、お母さま、ピアノ買ってちょうだい——」

「ねえ、私たちの貯金帳のお金を、皆、出すから——」

と、まことに一姫二姫のまじめな請願である。

「僕のも出して、買おうよ」

と、三太郎も本気である。むろん、三児のを全部集めて出し合つても、何程ともならないのは分つている。けれども、本人達は真剣なので、

「ようし、お父さまも、今日から、電車に乗らないことにして、電車賃を貯金するかな」

ともいってみたりした。

「本当に、ピアノほしいねえ」

「本当ですわねえ」

心から、そういう父母の声色は、幼児たちにも、正しく通じないではなかつた。

「ねえ、買いましょうよ」

「買いましょうよ」

と、姉妹は、勇みたつ思いであつた。即ち、「買ってちょうだい」とは言わなかつたのである。父母と共に、ピアノ購入の夢を、実現しようとするのである。以後、

事さえあると、儉約することを、一姫二姫から主張して、ピアノ購入の夢を、一日も早く実現しようというのである。しかし、どんなに儉約しても何年たつても、ピアノは購入できないので、郷里のおじいさまへ、ねだれようかとも、ある夜、三児が眠つた後で話し合つたこともあるが、幸にして或る作曲家の友人の親切から中古品で、アクションだけは、ドイツもののが格安で購入できた時、一姫二姫三太郎が、どんなに悦んだことか。父たる私も、母たる妻も、可愛い口を揃えて、お礼をいうのを聞きながら、おとなる自分たちの夢が叶つたのであるから、何だか、くすぐったくも感じて、

「久しい夢が実現したね」

「何だか、子どもたちよりも、私達の方が、幸福なような気がしますわ」

と、まことにまことに、もつたないほどの嬉しきであつた。三児の夢をも実現してやることができたわけだから、この上の嬉しきは、實際、今までになかつたのである。

その後、三十年、四十年の間に、いろいろの夢がありがたくも実現したことはあるが、三、四十年前、ピアノというものを購入しえたあの時ほど、嬉しかつたことは、無かつたように思える。ほんとうに、私たちは何様へ、感謝すべきであつたのか。少なくとも私は、その時、それには思い及ばなかつたようである。今からでも遅くあるまい。私は、何さまへ、逆戻りして、感謝すべきなのであろうか——。

(昭和36・11・6・西片町宅にて)

